姶良歴史ボランティア協会広報誌第 16 号　　発行日　平成 24 年 6 月 14 日(木)

あいらの歴史と物語

発行責任者：姶良歴史ボランティア協会
会　長　橘 木 雅 晴
編　集　者：広報部長　竹之下　洲　一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県姶良市東餅田 498　　姶良市歴史民俗資料館 TEL 0995(65)1553

寄稿

御里窯の茶入

―発掘と文書からわかった薩摩焼の新しい歴史―

姶良市教育委員会社会教育課
課長補佐　関　一　之

平成７年と12年に行われた御里窯跡の発掘調査では、たくさんの茶入の破片が出土しました。茶入とは手の平にのる小壷で、茶席で用いる茶道具のことです。御里窯は文禄・慶長の役や関ヶ原の戦いで有名な島津義弘が、晩年に住んだ加治木屋敷の空堀の斜面に造らせた小規模な登り窯です。慶長 12 年(1607)から元和 5 年(1619)頃まで、約 12 年間使われていたと考えられています。

この窯については、これまで島津義弘が老後の悠々自適な生活の中で、義弘好みの茶器を朝鮮から連れてきた陶工たちに焼かせていた「お楽しみ窯」といわれていました。ところが、出土品を見ると茶入の量が際だって多く、まるで茶入を焼くための専用窯ではないかと思えるぐらいでした。

御里窯跡から出土した茶入

その茶入を詳しく観察すると、胴部と底部を接合して作った手作り感のあるグループ（Ⅰ類）と、巧みなロクロ術で一体成形で作られたグループ（Ⅱ類）があり、それはまるで素人と玄人の「つくり」のように見えました。この２種類の茶入が、同じ場所から混ざり合って出土したのです。

出土品の中には、登り窯で使う「ハマ」と呼ばれる窯道具（製品の下に敷く台）もたくさんありました。これは朝鮮半島の陶工のうち、壷やカメなど貯蔵器を作る陶工(甕匠)が使用する道具で、焼き物の底になる粘土板の上に粘土紐を巻き上げて内外からたたいて甕を作る時に使います。この作り方は、Ⅰ類茶入の基本的な作り方と同じですので、「ハマ」の発見は渡来陶工たちの出身地や性格を知る手がかりとなりました。

次に文書を紹介しましょう。江戸時代の初め（慶長から元和の頃）、「天下一茶人」だった古田織部が薩摩焼の茶入を高く評価したことが「島津家文書」に書いてあります。このため薩摩焼の茶入は大人気となり、なかなか入手できない「あこがれの品」になっていました。その理由としては、たたき成形で大形の甕づくりを得意としてきた陶工たちが苦心して作った稚拙な小形瓶と、古田織部の型破りな美感が一致したためと考えられます。次に織部の後継者となった小堀遠州は、型破りな美より均整のとれた美を重んじました。このことが２種類の茶入が生まれた理由です。

また、島津義弘が江戸にいた藩主家久に宛てた手紙には、「茶入を６個送ったので、うち一つを福島正則殿へ差し上げて残りは有効活用しなさい」という内容があります。慶長から元和の頃は、島津氏にとって関ヶ原の戦いから日も浅く、幕府との外交には細心の配慮が図られていたことでしょう。この手紙には、中央の茶会で人気のあった「薩摩の茶入」を、幕府関係者や有力大名への贈答品として活用していた様子が書かれているのです。

発掘調査の出土品を調べていくと、これまで知られていなかった最も古い薩摩焼の姿が見えてきました。御里窯は決して島津義弘のお楽しみ窯ではなく、ここで焼かれていた茶入は、外様大名島津氏の興亡がかかった外交を支えた茶入だったのです。

ガイド練習報告　蒲生史跡めぐり③

掛　橋　坂　め　ぐ　り

歴史の道掛橋坂　今よみがえる

竹之下　洲　一

先日５月 12 日、「歩き・み・ふれる歴史の道掛橋坂」と銘打った蒲生町西浦から北地区に残る古道めぐりのウォーキングに参加しました。

掛橋坂は、蒲生と祁答院方面とを結ぶ 1km ほどの江戸時代に整備された石畳道で、重富の白銀坂や加治木の龍門司坂と同じころ活用された地方街道です。

『祁答院薗牟田郷誌』に、「藩政時代は上納の米俵を二俵ずつ馬の背に負わせて、帖佐のお蔵まで運んでいた。途中西浦の**かけはし**は道が狭いばかりでなく、下り坂でその上岩石を削った路面だったので足がすべり、馬も人も難儀だったと祖母が話していた」と書かれています。

明治 30 年代以降は馬車輸送のため急勾配のこの坂を避け、う回路をとった現県道が整備されました。その後、掛橋坂は地元の人々の生活道路として使われていましたが、車時代になり多くの人々に忘れ去られてしまいました。

昨年川内市の郷土史家山元貞秋氏の確認調査や、今年１月からの市教育委員会による全容解明にむけた作業が本格化し、今まさに歴史の道としてよみがえろうとしています。

瑞光山満徳寺

恒　吉　一　洋

瑞光山満徳寺は蒲生漆地区にあり、明治32年（1899）創立の浄土真宗本願寺派に属するお寺で、本尊は阿弥陀如来です。

それまで漆地区にはお寺がなく、檀家は蒲生上久徳にある幽栖寺に属していました。しかし幽栖寺は漆からは距離的に遠く、一時、漆に説教所を設置したりしました。しかし、それでも何かと不便だったので，漆地区に自前のお寺を建てることになり、手続きをとって、明治 32 年(1899)に瑞光山満徳寺として発足しました。

それから明治38年(1905)までは加治木の性応寺に属しました。その間、明治36年(1903)に本堂も完成し、宮崎県広瀬村にある蓮光寺の僧を副住職として迎えました。明治38年(1905)5月には、蓮光寺住職の二男岩切覚法が開基住職として満徳寺に着任しました。現在はその孫の岩切順孝氏が３代目住職として勤めています。

平成18年(2006)には重富平松に出張所として立派な二つめの満徳寺が建立されました。今では檀家の数も漆の満徳寺を上回っているそうです。

永興寺と廃仏毀釈

藤崎　幸雄

大定山永興寺は能州曹洞宗総持寺の末寺で、寺禄54石余り、七堂伽藍を持ち、蒲生家の菩提寺でした。明徳年中(1390～1393)蒲生12代清寛の開基で開山は量外聖寿和尚です。また応永元年(1394)、島津家の菩提寺として建立された玉龍山福昌寺も総持寺の末寺で、開基は島津7代元久、開山は石屋真梁和尚、量外・石屋ともに丹波永沢通幻和尚門下十哲の一人です。

明治元年(1868)3月、明治新政府は神仏分離令を布告、それに伴い薩摩藩も4月藩内に布告しました。同年9月政府は「神仏混淆禁は廃仏に非ず」の布告を出しましたが、薩摩藩は率先して廃仏毀釈運動の先頭に立ち、翌明治2年度中に藩内1066寺は全廃され、2964人の僧侶は還俗しました。多くの藩がためらった廃仏毀釈を藩主導で徹底して実行していったのです。

薩摩藩では、維新前より指導者の間で排仏思想が高まり、そのための準備が進んでいました。特に、蒲生郷においては慶応2年～3年(1866～67)に所三役が、永興寺をはじめ郷内すべての寺院の廃寺を藩に願い出ています。

明治9年(1876)、信仰の自由が認められましたが、その後、永興寺の法灯がともることはありませんでした。跡地は現在蒲生小学校となっています。

百万遍供養塔

松下　澄行

今から450年前、永禄5年～7年(1562～64)に百万遍の念仏供養がなされたときの碑です。

これは、僧侶や信者が集まり、数珠を回しながら百万遍の念仏を唱えるもので、蒲生城落城5年後に供養がなされたとされています。

右側の四角の碑には、「永禄五年・・・・」

左側の丸長い碑には、「奉百万遍供養」と刻字されています。

百万遍供養塔

蒲生城が落城したのは、弘治3年（1557）と伝えられています。

場所は、城山公園（蒲生城跡）の駐車場入口手前から右の山道を約350m入った東側山中にあります。

漆の庚申塔

松元　淳一

県道463号(蒲生～漆)線を北上し、広木橋を少しばかり過ぎると、左へ上る細い坂道があります。これを上って小高い峠を越えると、右手愛宕山登山道入口に「漆の庚申塔」案内の標柱があります。この愛宕山山頂に漆の庚申塔があります。現在知られている本県の庚申塔のうちで、最も古い年代のもので、昭和50年3月31日県の有形民俗文化財に指定されています。

凝灰岩製の舟形で表面左わきに、「大永三年(1523)癸未　庚申之霜月(11月)吉日結衆　謹立」と彫られ、正面下段に全徳・福饒・浄宮などの19人の結衆名が横に刻まれています。

庚申の日には、三尸の虫（上尸・中尸・下尸）が眠った人の体の中から抜け出して天に昇り

漆の庚申塔

神様(天帝)にその人の罪を告げて早死にさせると信じられていました。このため、人々は徹夜して長生きを願いました。これを庚申信仰といいます。戦国時代の「大永三年」の銘をもつこの石塔は、当時漆地区ですでに庚申信仰が広まっていたことを示す貴重な文化財です。

歴史民俗資料館所蔵品紹介

「もっこ」に乗って指揮する忠元の絵

西田　實

山田城攻撃の絵

上の絵は、慶長4年(1599)6月23日、島津軍が、伊集院忠真の支城である山田城を一斉に攻撃した「庄内の変」の一コマです。

そのとき、老将新納忠元が「もっこ」に乗って指揮する様子を絵にしたものです。

忠元は、太守義久公の命を受け出陣しました。当時、忠元は馬にも乗れない75歳の老体でしたので、馬の代わりに「もっこ」を担がせ、勇戦したというのです。

義弘からは「極老の出陣前代未聞」と書状がおくられ、家久からは「老後の軍労比類無し」として、幸光(ゆきみつ)銘の脇差が贈られたといいます。

鎧(よろい)はつけず,茜(あかね)木綿の帷子(かたびら)をつけ、裾をからげて奮戦した武将村尾松清も描かれています。

平成24年度ボランティアガイド実施報告1

日　程	4月1日(日)　9：00～14：30
主　催	牟礼岡地域活性化チーム「青年熟年パワー」の皆さん
参加者	県内各地の小学生から80歳代まで110名
コース	白銀坂駐車場→JTの森→島津ゴルフ場→牟礼岡団地
感　想	牟礼岡団地の少子高齢化が進む中で、地域外から多くの人を呼び込もうと計画された。予想以上の参加者があり、春の穏やかな一日の白銀坂ガイドを努めた。
担当者	竹之内和仁・濱口純則・佐土原保子

姶郷(あいきょう)

新原重志先生顕彰碑

恒見　勝則

住吉神社境内にあるこの碑は、昭和54年(1979)姶良町教友会が住吉出身の新原氏の遺徳をしのんで建立したものである。氏は、昭和5年(1930)台湾霧社の学校長であったが、霧社高砂族の抗日蜂起事件に遭遇し殉職した。このとき日本人は134名(うち氏の実子2名)の犠牲者を出し、蜂起側も多くが集団自決して日本の圧政に抗議した。

歴史用語解説　(竹之下洲一・恒吉一洋)

『総持寺』　横浜市鶴見区にある曹洞宗の本山。もと石川県鳳至(ふげし)郡の行基開創と伝える寺で真言宗。元亨元年(1321)螢山(けいざん)紹瑾(じょうきん)が譲り受けて禅宗に改宗。永平寺と対立し徳川家康の調停で、能登本山となる。明治31年(1898)の焼失を機に、明治44年(1911)現在地に移る。

『所三役』　薩摩藩は鹿児島城下以外の地方を治めるために、113の郷を置いた。郷の責任者は地頭であるが、地頭は任地へはほとんど赴かず、実質的な郷支配は、地域に住む郷士から選ばれた郷士年寄・組頭・横目が行った。この三役を所三役と呼ぶ。

郷士年寄は郷における最高職、組頭は郷士の教導や郷の警備にあたり、横目は警察・訴訟・検察を担当した。この所三役の下に諸役人が置かれ、郷内の統治をおこなった。

『幽栖寺』　浄土真宗本願寺の末寺で、蒲生の上久徳(やましな)にある。もと京都山科にあり、無住の寺となっていたものを、明治22年(1889)に、現在地に建設されていた蒲生の説教所に寺号としてもらいうけた。これが蒲生における幽栖寺の始まりである。当初、漆地区の人々も幽栖寺の檀家であったが、漆に満徳寺が建てられたことにより、幽栖寺から独立した。

編集後記　私たち姶良ボランティア協会では、平成23年度一年間は蒲生町内の史跡研修に努めてまいりました。第16号では、前号に引き続き、これらの研修成果の一部を報告いたします。

私たちの協会も、創設以来本年度で6年目を迎えます。今後とも姶良市内のよき史跡ガイドができるように、研さんを積み重ねていきたいと思いますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。